

明治大学政治経済学部  
西川伸一ゼミナール機関誌

# BEYOND THE STATE

第 25 号



2024・3・26

きのう自分の担当科目である現代国家分析の期末試験があり、試験監督をした。受験した学生はわずか一六名なので、監督といっても楽なものである。教卓の椅子に座ってぼんやりして時間が過ぎるのを待った。そのさなか、昔の試験監督はたいへんだったなあと記憶がよみがえってきた。

いまアカデミーコモンが建っている場所に、かつては5号館、6号館、7号館という三つの校舎があった。その中でいちばん大きい教室は6号館四階の641教室だった。四〇〇人くらい入っただろうか。必修科目など履修者の多い科目の試験はたいいていこの教室で行われた。

一九九〇年四月から三年間、私は政治経済学部専任助手を務めた。現在の助手制度とは全く異なり、必要とされる本数の論文を執筆してそれらが教授会の審査を通れば、専任講師に昇格採用される。専任講師はテニユア（終身在職権）を与えられるので、それに就けば定年の七〇歳まで勤務できる。専任助手は研究をして論文を作成するばかりか、期末試験や入試の試験監督などの校務も担わなければならない。期末試験期間になると、一週間以上にわたって試験監督業務にずっと狩り出された。

当時は二部もあったので、朝九時から夜一〇時まで、途中「空きコマ」はあるものの試験監督に終日当たった。中でもいやだったのが、641教室で行われる試験の監督だった。学生が多いことだけで十分なプレッシャーである。加えて、6号館はいまサークルボックスが入っている10号館のように、外廊下しかなかった。二部の後期試験（当時は春学期・秋学期ではなく前期・後期とよんだ）になると、外廊下には、寒い夜に次の試験のため入室を待つ学生たちであふれかえる。試験終了とともに凍えた彼らが教室に入ってくる。教室内は彼らと答案用紙を提出する学生とが入り交じって大混乱に陥る。答案回収に時間がかかるので、どさくさに不正行為が簡単にできてしまう。

不正行為といえば、手元にあるきのう配付された「定期試験監督要領」には「1名おきに着席」させるようにと書いてある。ところが、当時の教室事情から641教室ではそれが不可能な場合があった。席をあげずに学生を座らせないと入りきらないのだ。隣の学生の答案をのぞくことなど造作もない。

また、いまでは途中退室は試験開始後三〇分から五〇分までと決められている。以前は試験開始後二〇分から試験終了時刻まで途中退室が可能だった。なので、試験終了時刻が近づくと、途中退出する学生が続出し、答案の提出場所が混雑する。641教室ならばなおさらである。試験終了時刻前後の答案の提出場所はアナーキーと化していた。

これが厳正な期末試験なのか、と641教室の試験監督業務を終えるたびに砂をかむ

ような無力感に苛まれた。さらに、なぜこんなに641教室ばかり当てられるのかと憤った。だが、担当教室を割り当てて事務方としては、最若手の「教員」（専任助手は授業はもたないが、教授会などにはオブザーバー出席した）を最も負担の重い教室に使うほかなかったのだろう。

とにかく、641教室の試験監督は悪夢だった。一方で、ほかの試験教室では悪いことばかりではなかった。この頃、私はアメリカンフットボール観戦にはまっていた。明大アメフト部は愛称をグリフィンズという。秋のシーズンにはグリフィンズの試合を見に行くのが楽しみだった。あるとき、試験教室でグリフィンズのスタジャンを着た学生がいた。尋ねると選手だという。何度か彼の試験教室の担当になったので、試験終了後に声をかけて「あの試合のあのプレーはどういう意図だったの？」など質問をした。彼はうれしそうに説明してくれた。

また、あまりプレッシャーのかからない試験教室の場合、巡回しながら左利きの学生を数えていた。観察を重ねた結果、左利きの学生は一〇人に一人であるとの「法則」を発見した。その後は試験監督のたびに「法則」の検証を行っている。きのうの試験でもこの「法則」が正しいことを確認した。

南こうせつとかぐや姫の名曲「神田川」（一九七三）のサビは、「♪若かったあの頃何も怖くなかった／ただ貴方のやさしさが怖かった」である。それを借りれば、「♪若かつ

たあの頃何も怖くなかった／ただ641の試験監督が怖かった」。もちろん怖い先生も  
いっぱいいたが。

二〇二四年一月三〇日 さて、これから採点にかかります。